

京都の水辺の歴史的変遷と都市防災に関する研究

萩原良巳・○畠山満則・岡田祐介

1. はじめに

京都市周辺には花折断層、西山断層、黄櫈断層に囲まれ、しかも活動期に入っていることから、いつ地震が発生してもおかしくない状況である。1995年の阪神淡路大震災の教訓から、河川などの水辺は消防用水やトイレ用水、避難路などに活用できるなど都市部において防災・減災に大きな役割を占めることを再認識させることとなった。しかし現在、京都市の水辺は鴨川と桂川のみであり、市街地には河川が流れていない。堀川や西高瀬川、紙屋川は地図上では河川だと認識されているが、実際は三面コンクリート化された小河川である。高度経済成長期以前までは度々水害に悩まされていた地域であった。しかし、現地調査と高齢者を対象としたヒアリング調査で、堀川は現在、三面コンクリート化されているが、堀川についての伝説や風景などの話が多く出ており、ドブ川となる前（戦前）の堀川を懐かしむ声を少数であるが聞くことが出来た。現在、京都市街地において水辺と呼ぶことが出来るのは鴨川だけで、他の河川は三面コンクリート化または暗渠化されている。従来の研究より、京都市街地は震災リスク要因として高齢者・老朽木造家屋・道幅の狭い路地・袋小路が多く、オープンスペースが不足している。さらに消防栓の範囲が限られていて、震災時には水道がつぶれて使用できなくなる可能性が高くなる事など従来の研究により様々なことが明らかにされている。

本研究では、袋小路や高齢者のほかにオープンスペースの一部である水辺と2008年頃に完成予定である堀川水辺復興再生事業に着目する。まず、京都市街地における防災・減災の基礎情報として、水辺と災害の変遷を歴史的な背景を踏まえてGISで表現し、時代別における水辺の増減と原因、利用価値について分析を行なう。次に過去の研究から得られた京都市市街地の脆弱性とそれを軽減化するためのコミュニティに関して考察を行う。これらの考察を踏まえて堀川水辺復興再生事業が地域防災に与える影響について考察する。

2. 研究対象地域・時期の設定

現在の日常生活において視覚的にも大きな境目と考えられる北は北大路通、南は九条通、西は西大路通、東は居住区がなくなる山までの京都市市街地を対象地域とした。研究対象期間は、豊臣秀吉による都市計画から現在までとした。京都市は抜本的な都市改造が行なわれたのが平安京造営と豊臣秀吉による都市改造の計2回で、町の様子だけではなく時代別にも区切ることが出来るためである。

3. 京都市市街地の歴史的変遷

水辺の価値観と利用目的は各時代によって大きく異なっていて、それに応じて水辺も増減していることがわかった。豊臣秀吉の都市改造以前は下水路や庭園の水などの生活基盤、そして、京都の特有の食や伝統工芸の基礎、発展としての利用であった。豊臣秀吉による都市改造から琵琶湖疏水建設前は田畠などの用水路、舟運などによる物資の運搬から友禅染や京料理などの文化の成熟など積極的な水辺の活用期に移った。琵琶湖疏水が完成し渇水の心配がなくなった後は、舟運から電車などの交通機関が変化し、また、工業化により水辺の機能を失い、水辺との直接的な関わりを失うようになり暗渠化してきた。そして、高度経済成長期による急激な都市化が進み、人々は経済性・利便性を追求するようになった。水辺は汚染され、また下水道化や暗渠化されるようになり背を向けられた存在となった。

しかし、高度経済成長期には物質的な豊かさが第一であったが、次第に精神的な豊かさを求めるようになった。また、1995年の阪神・淡路大震災により、水辺は都市域における災害時の被害を軽減し、復旧、復興にむけた諸活動を円滑に進める上で不可欠な要素であることを再認識され、関心が高まっている。しかし、京都市街地では水辺のネットワーク化が未発達であることはおろか鴨川以外に水辺と呼べるもののが無く、早急に対策を取る必要がある事が明らかとなつた。